

第 13 章 言語の変化 (宮下治政)

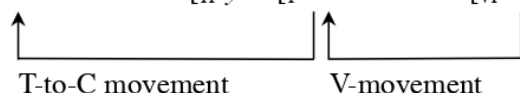
<基本問題>

1. PDE の疑問文 'Are you crazy?' の派生を示しなさい。

(解答例) PDE の be 動詞を含む疑問文(i)は 2.3 節の(20)に示したような V 移動と T-to-C 移動により、(ii)のように派生される。

(i) Are you crazy?

(ii) [_{CP} be+T<Pres>+C [_{TP} you [_T be+T<Pres> [_{VP} be crazy]]]]?



(ii)では、be は形容詞句の crazy と VP を形成し、次に、V 移動によって T 位置へ移動し、この位置で Pres と組み合わさる。T 位置で Pres と組み合わさった be は、さらに T-to-C 移動によって C 位置に移動する。Pres は be と既に組み合わさって be+T<Pres> (音声的に具現化されると are) となっているので、C 位置へ do 挿入をする必要はない。この派生は LME・EModE の疑問文 (2.3 節の(9)) の派生と同じである (2.3 節の(21)も参照)。

2. EModE でもこのような疑問文の例 'Why Romeo, art thou mad?' (Shakespeare, *Romeo and Juliet*, I.ii.54)が観察されるが、be 動詞を含む疑問文は PDE でもなぜ変化していないのか考えなさい。

(解答例) PDE では be 動詞は一般動詞と異なり、am, are, is, was, were というように人称や数による屈折変化が見られる。3 節で説明した不活発理論に基づくと、be 動詞については V 移動の消失の原因となる屈折接辞の水平化が起こっていないので、PDE を PLD として文法獲得中の子どもは be 動詞に関しては V 移動パラメータの値を「有り」に設定すると考えられる。その結果、EModE から PDE に至るまで be 動詞の V 移動が可能である状態が継続することになり、be 動詞を含む疑問文には変化が生じないと説明される。

<発展問題>

1. (i)-(ii)の例文は OE から ME にかけて観察される動詞第 2(V2)現象と呼ばれる統語現象で、主節の先頭に wh 句や Neg が現れる場合、V や Aux は第 2 位置に現れる。

(i) wh 句文頭

Hwi wolde God swa lytles þinges him forwyrnan

why would God such small things him deny

‘Why would God deny him such a small thing?’

(ÆCHom, I.14 / Kemenade(1987: 43))

(ii) Neg 文頭

Ne sende se deofol ða fyr of heofenum, þeah þe hit ufan come

NEG sent the devil the fire from heaven though that it above came

‘The devil did not send the fire from heaven, though it came from above.’

(ÆCHom, II.110 / Hulk & Kemenade(1997: 189))

V2 現象では V や Aux が節中のどの位置に移動しているのか説明しなさい。また PDE では V2 現象は残っているのか、また残っているなら、どのようなかたちで残っているのか具体例を挙げて説明しなさい。

(解答例) wh 句/Neg 文頭 V2 現象では、V や Aux は主語の前の位置にあることから、LME・EModE の疑問文と同様に、V や Aux は T-to-C 移動によって T 位置から C 位置へ移動している。例えば(i)と(ii)の V2 語順はそれぞれ(iii)と(iv)のように派生される。

(i) wh 句文頭

Hwi wolde God swa lytles þinges him forwyrnan

why would God such small things him deny

‘Why would God deny him such a small thing?’

(ÆCHom, I.14 / Kemenade(1987: 43))

(ii) Neg 文頭

Ne sende se deofol ða fyr of heofenum, þeah þe hit

NEG sent the devil the fire from heaven though that it

ufan come

above came

‘The devil did not send the fire from heaven, though it came from above.’

(ÆCHom, II.110 / Hulk & Kemenade (1997: 189))

(iii) [_{CP} *Hwi* [_C *will*<Past>+C [_{TP} *God* [_T *will*<Past> [_{VP} ... *forwyrnan hwi*]]]]]



wh-movement

(viiia)では T 位置にある Pres は T-to-C 移動によって C 位置に移動し、疑問詞句 (wh 句) の what も VP 内から wh 移動によって CP の指定部に移動している。C 位置にある Pres と VP 内にある know の間には主語の you が介在しており、Pres と know が隣接していないため、C 位置にある Pres は屈折接辞として音声的に具現化される場合、動詞的要素と組み合わせることができないため孤立してしまう。2.3 節で見たように、この孤立してしまった Pres を救済するために(viib)のように形態音韻部門で C 位置へ do 挿入が起こり、Pres は Aux の do と組み合わせる。(viiiia)でも T 位置にある Past は T-to-C 移動によって C 位置に移動し、否定副詞の never も VP 内から Neg 移動によって CP の指定部に移動している。C 位置にある Past と VP 内にある fail の間には主語の John が介在しており、Past と fail が隣接していないため、C 位置にある Past は孤立してしまう。ここでも、この孤立してしまった Past を救済するために(viiib)のように C 位置へ do 挿入が起こり、Past は Aux の do と組み合わせられて did となる。

OE から ME にかけて観察される V2 現象は概略的に示すと [CP XP V+ α Subj [VP ... \forall ...]] もしくは [CP XP Aux+ α Subj [VP ... V ...]] という形式であるが、PDE で観察される V2 現象は [CP wh/Neg be+ α Subj [VP ... **be** ...]] もしくは [CP wh/Neg Aux+ α Subj [VP ... V ...]] という形式に限られるので、残留 (residual) V2 現象と呼ばれる。V2 現象と残留 V2 現象は英語の通時的変化においてのみ観察される変異ではなく、共時的な言語間変異としても観察される現象である。詳しくは Woods & Wolfe (eds.)(2020)等をご参照ください。

<参考文献>

Woods, R. and S. Wolfe (eds.) (2020) *Rethinking Verb Second*, Oxford University Press.